

## 副詞用法のno doubt (1)\*

福 田 薫

## 1. はじめに

文法化(grammaticalization)とは、ある語彙項目が本来の意味や用法のほかに新たに文法的な意味や用法を獲得していく過程である。文法化の過程で新しい意味が本来の意味にとって代わることもあるが、多くの場合、新旧の意味の共存によって、多義化、重層化という現象が生じる<sup>(1)</sup>。

現代英語において no doubt という語句は文の主語や動詞の目的語として使われるほかに、たとえば(1)のように、文修飾の副詞に似た用法がある。

(1) a. No doubt it'll rain soon.

b. You're tired, no doubt. I'll make you a cup of tea.

(Swan 2005: 378)

(1)の no doubt は、残りの部分で記述されていることがらがどの程度真実であるかについての話し手の判断を表している。機能的には、probably, certainly などの副詞や in all probability などの前置詞句、および I think, I guess などの挿入句と同様である。本稿では、このような使い方を no doubt の副詞用法と呼ぶことにする。

副詞用法の no doubt については、これまでにいくつかの先行研究において言及されている。たとえば、Greenbaum(1969: 215)は、no doubt が表面上名詞句の形式をとるものの、態度離接詞(attitudinal disjunct)と呼ばれる文副詞として機能すると述べている。Biber et al.(1999: 866)も同様に、態度副詞類(stance adverbial)は文の内容に対する話し手の態度や評価を表すが、no doubt は態度副詞類に属する名詞句の唯一の例である、と述べている。

しかし、従来の研究においては、法副詞表現としての no doubt の例示や記述、頻度調査の報告にとどまっており、no doubt の語法上の特徴を十分に明らかにしているとは言えない。とりわけ、副詞用法の no doubt の統語的、意味的特徴を分析し、文法化の視点から他の法副詞表現と比較する試みはなされていない。そこで本稿では、現代英語のコーパス調査を行い、主に対応分析を用いて副詞用法の no doubt および

その類義表現の使用実態を比較し、計量的な観点から no doubt の現代語法の特徴づけを試みる<sup>(2)</sup>。

以下、第2節では、BNC コーパスからの検索例を提示しながら、no doubt の副詞用法に特徴的な統語的性質を記述する。第3節では、no doubt の文中での生起分布の調査に基づき、他の法副詞の分布との比較を通して、分布上の特徴を検討する。第4節では、構成素修飾の使用実態を調査し、他の法副詞との比較をおこなう。このような調査と分析を踏まえ、現代英語において副詞用法の no doubt は、法副詞表現の中でも確信の度合いが比較的低い成員としての地位を得ていることを指摘する。第5節はまとめである。

## 2. 脱範疇化と語彙化

この節では、BNC コーパスの検索例を挙げながら、現代英語では no doubt の法副詞用法が相当程度に確立されていることを示す。以下では、法副詞用法において no と doubt の脱範疇化がそれぞれ進んでおり、もはや本来の否定限定辞あるいは名詞としての性質を持たないことを指摘する。

現代英語において、no doubt という語連鎖は名詞句として用いられ、(2)のように、文の主語としてあるいは動詞や前置詞の目的語として働く。

- (2) a. This was a decision of the House of Lords 25 years before the pronouncement of Lord Diplock previously quoted, and no doubt has been cast upon it. (FRA<sup>(3)</sup>)  
 b. 'I feel there are too many people who cast no doubt on today's prosperous Japan. Japan is twisted and warped.'  
 (A3R)  
 c. Jay would leave her in no doubt. (A0L)

当然ながら、名詞用法の no doubt の主要部 doubt は名詞の性質を示す。たとえば、(3a, d) では複数形で現れ、(3b) では形容詞によって限定修飾され、(3a, c, d) では節補部や前置詞句補部を取ることが可能である。

- (3) a. He had no doubts that the androids would kill him once his crime had been discovered. (HTY)  
 b. ..., although no serious doubt is put on the validity of observation- data on the police. (A5Y)  
 c. Well let's say we've made up for it, for you may have no doubt whom to thank for your performance at the court. (FU6)

- d. Hamlin has no doubts about his new club's target this season. (K20)

他方、no doubt は副詞的に使われることもある。たとえば、(4)の no doubt は文の主語あるいは動詞や前置詞の目的語のいずれでもない。この語句は、文が表すことからの蓋然性に関する話し手の評価を表しており、名詞句というよりむしろ probably, certainly, I suppose などの法副詞表現に近い。

- (4) a. Some voters no doubt entertain the same misapprehension. (EW4)  
 b. Recalling no doubt the fate of Vera and Orton Chirwa, kidnapped near the border 10 years ago and still imprisoned, ... (CAG)  
 c. ... 'full' or 'sufficient' awareness — qualifications which recur in our argument without further explanation, with no doubt irritating frequency — ... (CB1)

名詞用法とは異なり、副詞用法の no doubt は完全に固定したイディオム表現となっている。このため、doubt が複数形になることや補部をとることが許容されないばかりでなく、no を別の限定辞で置き換えることや、形容詞などの修飾語句を挿入することもできない。たとえば、(5)に対応する(6)の各文はいずれも非文法的と判断される。

- (5) a. No doubt I had a lot to learn, but this was boring me. (FAT)  
 b. You will no doubt feel conscientious. (FEU)  
 c. He will no doubt tread very carefully. (A1G)  
 d. She was no doubt trying to help in her own way. (BMG)
- (6) a. \*No doubts I had a lot to learn.  
 b. \*You will no doubt about it feel conscientious.<sup>(4)</sup>  
 c. \*He will little doubt tread very carefully.  
 d. \*She was no serious/grave doubt trying to help in her own way.

副詞用法の no doubt においては、doubt の名詞的性質が失われているばかりでなく、否定的限定辞 no の本来の性質も失われている。たとえば、Emonds(1976)によれば、否定辞類を含む構成素が文頭に前置されると、主語と助動詞の倒置が引き起こされる。しかし、副詞用法の no doubt が文頭に生じていても主語助動詞倒置は起こらない<sup>(5)</sup>。

- (7) a. Under no conditions may they leave the area.  
 b. Never have I had to borrow money.  
 c. Nothing did I see that I liked. (Emonds 1976: 28)
- (8) a. No doubt you will find advancement here. (FSE)  
 b. \*No doubt will you find advancement here.

第2に、否定的限定辞のnoはいわゆる否定極性項目(negative polarity item)を認可することができる。(9)のように、名詞用法のno doubtはat all, what(so)everなどを伴うことがある。これに対し、法副詞用法のno doubtはこれらの語句を認可できない。

- (9) a. ... and she had no doubt at all as to who had been issuing orders.  
 (HGK)  
 b. Simon Peter has no doubt whatever that it remains imminent...(EDY)
- (10) a. \*She will no doubt at all lose her mind.  
 b. \*No doubt whatever she will lose her mind.

最後に、Bellert(1977)は法性と否定の関係に関して次のように述べている。すなわち、話し手が命題内容の蓋然性を査定する際、(11a)のように命題の真性に関する確信の度合いは異なりうるけれども、(11b)のように否定的な確信をもって査定することはありえない。実際、(12)のように法副詞として使われるとき、no doubtは全体として否定的意味合いを持たない。

- (11) a. { Probably/Undoubtedly } John has/will come.  
 b. { \*Doutfully/\*Not probably }, John has/will come.  
 (Bellert 1977: 343-344)

- (12) No doubt, John has/will come.

これまで観察してきたように、副詞用法のno doubtは常にこの形で使われる固定表現である。名詞句のno doubt(s)とは対照的に、副詞用法では、noもdoubtも本来の統語的性質を示さない。したがって、この用法のno doubtは分析的ではなく、むしろ全体としてひとつの単位として扱うのが適切であろう。この考えは次のような事実とも符合すると思われる。

- (13) a. His difficulty is accompanied by a no doubt symptomatic increasing distrust of universals so that, ... (CTY)  
 b. The warden's wife at the Beinn Eighe Nature Reserve told me the no doubt apocryphal tale of a traveller in Northern Canada laboriously ... (B1N)  
 c. He knew that it would make her feel inferior and stupid and insignificant beside the sultry Domino and her no doubt dazzling sexual experience! (JYD)

これらの例では、no doubtが冠詞や所有格代名詞などの直後に生じ、主要部名詞を前位修飾する形容詞をさらに前位修飾している。このような、いわゆる連接構造の3次語(tertiary)の位置に生じうるのは、程度、心的態度、および焦点化の副詞などに限られる。特に、名詞句の限定辞に後続する場合、複雑な構造を持つ表現は生じにくく、事実上1語の語に限られるように見える<sup>(6)</sup>。

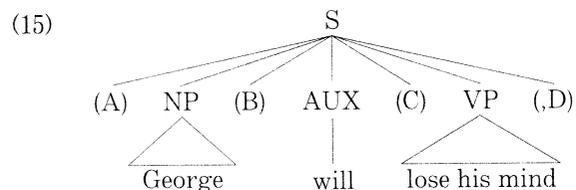
この節では、名詞用法と対照させながら、副詞用法のno doubtの統語的特徴を考察してきた。副詞用法のno doubtは脱範疇化が進んで名詞的性質を欠き、全体としてひとつの法副詞として語彙化されていると考えられる<sup>(7)</sup>。

### 3. 文中での生起位置

この節では、文中での生起位置に関して副詞用法のno doubtが典型的な法副詞と基本的に同じであることを例証していく。次に、BNCコーパスの調査に基づき、副詞用法のno doubtの分布と他の類似表現の分布を比較し、定量的な特徴づけを試みる。

英語の副詞の分類と分布に関しては、Greenbaum(1969), Jackendoff(1972), Bellert(1977), Ernst(1984)などの先行研究がある。中でもJackendoff(1972)は、副詞の生起する位置はその副詞の意味特性に応じて構造的に決定されると仮定し、各種の副詞の分布に関する事実を説明している。たとえば、probablyやcertainlyなどの法副詞は、(14)のように、主語の前後、第1助動詞の前後、および文末位置に現れうる。(15)が示すように、これらの位置はSに直接支配される位置である。Jackendoffによれば、法副詞も含めて一般に文副詞は、文全体を修飾する機能を果たすためには、このような構造上の要請を満たさなければならない。

- (14) a. Probably, George will lose his mind.  
 b. George probably will lose his mind.  
 c. George will probably lose his mind.  
 d. George will lose his mind, probably.  
 ((14b, c)は Jackendoff 1972, p.75 から引用)



no doubt が文修飾の法副詞として機能するには、主語の前後、第1助動詞の前後、および文末位置に生じなければならない。下の(16)のような例は、副詞用法の no doubt がまさしく法副詞の生起が予想される位置に実際に現れることを示している。

- (16) a. No doubt, Callaghan had his limitations. (A66)  
 b. European Monetary Union no doubt will demand the invention of the Pecu, the Personal European Currency Unit. (ANX)  
 c. The effects will no doubt have been revealed during the ARC. (G37)  
 d. The Under-Secretary will have a chance to catch Mr. Speaker's eye later, no doubt. (HHW)

次に、現代英語における副詞用法の no doubt の使用実態を調査し、定量的な観点からその類似表現との比較を行ってみたい。ここでは、副詞用法の no doubt と同様の機能をもつ表現として probably と doubtless を取り上げることにする。表1は、これらの表現がBNCコーパス中で使用される頻度を生起位置ごとに集計した結果を示している。表中の括弧内の数字は、調査対象の表現がコンマによって文の残りから切り離されている使用例の数である。

表1 BNCコーパスにおける生起位置ごとの出現頻度

	文頭 (コンマ有)	文中 (コンマ有)	文末 (コンマ有)	単独	計
no doubt	1,323 (133)	1,868 (573)	229 (194)	61	3,461
probably	1,592 (104)	24,055 (139)	218 (85)	126	25,991
doubtless	141 (13)	696 (16)	2 (1)	1	840
計	3,056 (250)	26,619 (725)	449 (280)	188	30,312

図1は、調査項目に関して生起位置ごとの相対頻度を図示したものである。

図1 BNCコーパスにおける調査項目の生起位置別の相対頻度

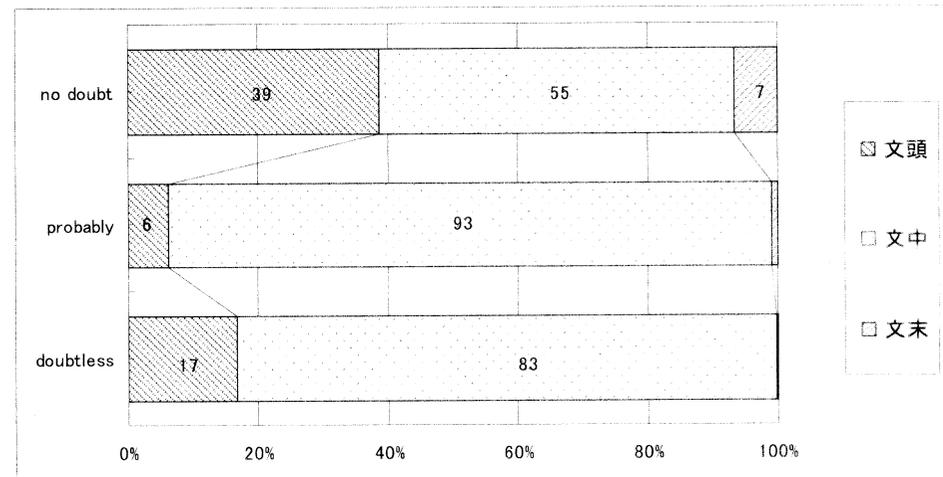


表1や図1から、対象の法副詞の位置ごとの生起頻度については、文中位置が大半を占め、次いで文頭、文末の順である点が共通していることがわかる。より詳細に副詞用法の no doubt の生起分布を probably や doubtless の分布と比較してみると、文頭と文末位置での使用比率が多く、文中に生じる比率が比較的少ないことがわかる。<sup>(8)</sup>

3つの法副詞表現の使用分布上の特徴をさらに探るために、各生起位置の頻度データに対応分析 (correspondence analysis) を適用してみる<sup>(9)</sup>。図2は、行カテゴリ(法副詞表現)と列カテゴリ(生起位置)の得点を同時表示したパイプロットである。一方、図3のパイプロットは、各生起位置での出現頻度をコンマの有無に応じて細分して集計し、その頻度データに対応分析を行った結果である。

図2 法副詞表現と生起位置のバイプロット

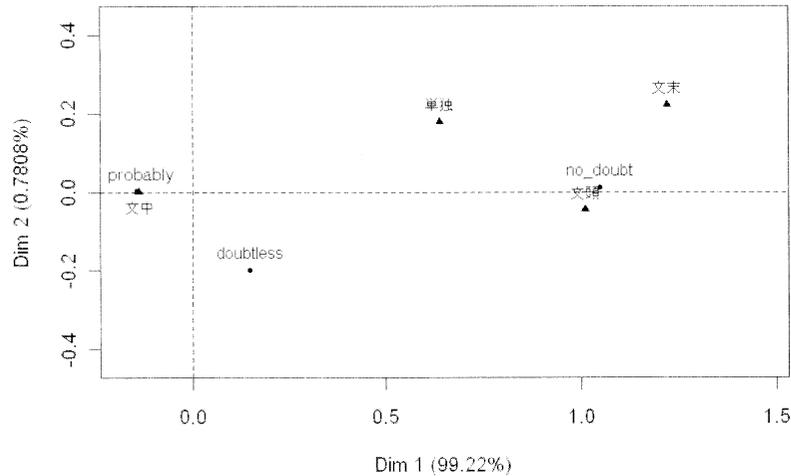


図3 法副詞表現と生起位置(コンマ有無)のバイプロット

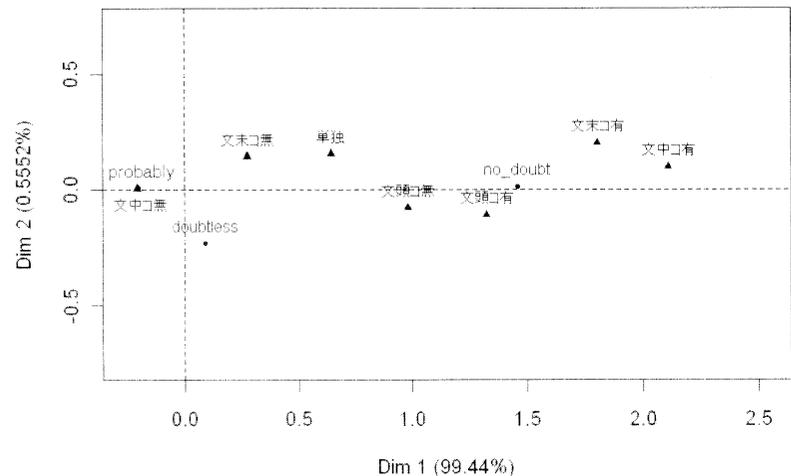


図2から、probablyは文中位置、no doubtは文頭および文末位置とそれぞれ強く関連していることが特徴的と言える。一方、図3からは、probablyは文中位置でコンマ

を伴わないことが顕著な特徴であるのに対し、no doubtは文頭、文中、文末いずれの位置でもコンマを伴うことが特徴的であると言える。

これまで見てきたように、副詞用法のno doubtが文中で生起可能な位置の範囲は、典型的法副詞のprobablyと重なる。すなわち、probablyが生起可能な位置にはno doubtもまた生起可能である。この意味では、no doubtは紛れもなく法副詞の一員であると言える。しかし、no doubtとprobablyの生起分布を量的な観点から比較してみると、両者の間に特徴的と見える差異がいくつか見つかる。すなわち、no doubtの文中位置での生起はprobablyほど多くはなく、どの生起位置においてもコンマによって文の残りから切り離されることがより多い。これらの事実が正確に何を意味するかは今後の研究を待たねばならない<sup>(16)</sup>。

#### 4. 構成素修飾

副詞用法のno doubtは、文中での生起位置ばかりでなく、それが修飾する構成素の種類に関しても、典型的な法副詞と同様の性質を示す。岡田(1985)によれば、法副詞のpossiblyなどはS節点に直接支配される位置に現れていても、文全体ではなく、焦点となる一構成素のみを局地的に修飾することができる。この現象は局地化(localization)と呼ばれ、法副詞およびonly, justなどの焦点化副詞に共通する性質である。さらに、これらの副詞は、(17b)のように、それが修飾する構成素の直前に置かれることもある。

- (17) a. Possibly, John went to Chicago by car.
- b. John went to Chicago possibly by car. (岡田 1985: 147)

典型的な法副詞は、文に限らず多様な種類の構成素を修飾できる<sup>(17)</sup>。BNCコーパス中の実例から、副詞用法のno doubtが文以外の構成素を修飾可能であることは明らかである。たとえば、(18a)では名詞句を、(18b)では形容詞句を、(18c)では動詞句を、(18d)では前置詞句を、(18e)では副詞句をそれぞれ修飾している。

- (18) a. With great patience and no doubt a certain amount of pride, for here he was expert, he minutely described the cultivation of pineapples, ... (ALU)
- b. These `glimpses', however, are tenuous, and no doubt capable of alternative explanations. (ALN)
- c. Furthermore, the police themselves are involved in the creation of myths and legends which can help to titillate the public and no doubt excite the imagination of potential imitators. (CS1)

- d. To understand this feeling of outrage, you must understand the imbalance inherent in my marriage, and no doubt in many others. (B19)
- e. So his son, no doubt unwillingly, was compelled to mount an expedition to discipline the count. (EA7)

加えて、副詞用法の no doubt は多種多様な節も修飾できる。(19a)では that 節、(19b, c)では分詞構文、(19d)では目的の不定詞節、(19e)では時制のついた疑問詞節、(19f)では副詞的従属節を修飾している。

- (19) a. The gifted young women retreated behind white Tudor-effect doors, each convinced, no doubt, that hers would be the marriage of exception. (EDU)
- b. On looking around he was staring at us, no doubt wondering what I was doing marching along with the French Commandos. (A61)
- c. An English aircraft, no doubt hit by anti-aircraft fire, crashed on a house in the village of Bourbourg (Tourlaville); ... (CLU)
- d. 'I can imagine what the real purpose of that coffee break was ... No doubt to brief you in your role as romantic go-between.' (JXT)
- e. Perhaps er, you'd just like to remind us erm, what your strategy is and no doubt how unfair you felt that comment was? (HYE)
- f. Partly no doubt because Bob had been brought up in Thornton, he was popular with local fans, ... (B2H)

さらに、副詞用法の no doubt は句の主要部のみを修飾することがある。たとえば、(20a)では形容詞、(20b)では助動詞、(20c)では前置詞を修飾している。

- (20) a. ... (not the Pheidian statue, but the holy, no doubt crude, old image that `fell from heaven') (G3C)
- b. Such comment may, and no doubt does, from time to time overstep boundaries acceptable to the individual or local authority so criticised. (FBV)
- c. ... he will have a drink with (and on) me just as readily (or so he makes it appear) as he will have lunch with (and no doubt on) the director of the US National Science Foundation; (B71)

一般に文副詞が修飾する対象は文である。文中の一部の構成素だけを修飾する用法は、文副詞の中でも法副詞だけに限られる。構成素修飾は、法副詞の使い方の中であまり使用頻度が高くなく、どちらかと言えば周辺的な用法である。しかし、上に挙げた(18)-(20)のような例は、いくぶん特殊であるとしても、次の事実を示しているという点で重要である。すなわち、副詞用法の no doubt が多様な種類の構成素を修飾可能であり、他の典型的な法副詞と同様の用法を獲得しているという事実である。

構成素修飾の注目すべき特徴のひとつは、それが等位接続構造 X and Adv Y の中で多用されることである<sup>(12)</sup>。たとえば、先に挙げた(18a-d)、(19e)、(20b, c)をはじめとして、次の(21)もそのような例である。

- (21) a. There were a million Muellers in Germany and no doubt a good many Louise Muellers, but ... (B20)
- b. Some say the men were armed, others not. A debate even begins about whether the army is not getting a little trigger-happy in its nervous and no doubt terrified tension. (AAU)
- c. Timing has always been, and no doubt will always be, a subject of debate. (CMM)

このように、副詞用法の no doubt は等位接続構造の第2項を前位修飾する位置に多く現れるように見える。この観察が実際に妥当であるかどうかは、等位接続詞 and と no doubt がこの順序で共起する確率を定量的に調べることで検証できる。Kilgariff(1996)は、BNCコーパスで頻度5以上のすべての語の頻度リストを提供している。BNCの総語数は約1億語(正確には100,106,029語)で、その中で and は頻度

表2 BNCコーパスにおける法副詞表現と等位接続詞andの共起

法副詞 (y)	観測度数 (F(y))	共起度数 (F(xy))	共起比率 F(xy)/F(y)	期待度数	相互情報量 (MI)
possibly	7,211	1,099	15.24	193	5.69*
doubtless	877	77	8.78	24	3.28*
no doubt	3,349	286	8.54	90	3.19*
certainly	18,647	1,058	5.67	500	2.12
probably	27,303	1,196	4.38	732	1.63
obviously	11,014	425	3.86	295	1.44
surely	6,352	158	2.49	170	0.93
clearly	15,349	351	2.29	411	0.85
undoubtedly	2,393	49	2.05	64	0.76

第4位で合計 2,682,863 回出現する。平均するとテキスト 100 語中約 2.68 語を占める計算になる。表 2 は、副詞用法の no doubt および主要な法副詞に関して、BNC コーパスにおける観測度数、共起度数（当該副詞が and の直後に生じる回数）と共起比率（当該副詞の総頻度に占める共起度数の割合）、期待度数（当該副詞と and の頻度から予想される共起度数）、および and との相互情報量 (mutual information, MI) の値とその有意性判断を示している<sup>(43)</sup>。

この頻度分析の結果から、上述の観察の妥当性が統計的に裏付けられると言える。副詞用法の no doubt が and に後続する割合は全体の 1 割近く (8.54%) を占めるばかりでなく、MI 得点の値は and と no doubt の結びつきが統計的に有意に強いことを示している。

次に、MI 得点に関して no doubt と他の法副詞を比較してみよう。MI 得点はコロケーションの強さを示す指標である。表 2 では and との MI 得点の高い順に法副詞を並べている。今回調査した法副詞の中では possibly の MI 得点が最も高く、次いで doubtless, no doubt の順に並ぶ。これらの MI 得点は統計的に有意であることから、上位 3 つの法副詞は and 直後の位置に特によく使用されることがわかる。これに対し、certainly, probably, surely, clearly, undoubtedly などの法副詞はこの位置ではそれほど多用されない。このことから、文の内容に対する話し手の確信度が比較的低い法副詞はこの位置でよく使用されるのに対し、確信度の比較的高い法副詞はこの位置にあまり現れない傾向が読み取れる。

上述の傾向は次のように解釈できると思われる。よく知られているように、等位接続構造 X and Y では、原則的に第 1 項 X と第 2 項 Y が統語的にも意味的にも同等の要素でなければならない。これを語用論的に見ると、聞き手は and を聞いた時点で、and の前の X と同等の要素が and の次に来ることを予想する。このとき、話し手が Y を X と真に同等とみなしているなら、等位構造の典型的なケースであるから、話し手は等位構造をそのままの形で使えばよい。他方、話し手が Y の X に対する同等性に多少の疑問を抱いていれば、同等性に関して何らかの留保を付け加える必要が生じる。そのような表現のひとつが、同等性に関する話し手の確信の度合いを表す法副詞である。等位構造は本来的に接続項の同等性を想定しているので、項の同等性が典型から離れるに従い、すなわち、同等性に対する話し手の確信の度合いが低くなるに従い、留保条件を付加する必要性が強くなるだろう。したがって、and と Y の間に確信の度合いの低いタイプの法副詞が多く用いられる傾向が生じる。やがて、and の直後に法副詞が生じていると、聞き手はそれが項の同等性に対する話し手の確信度の低さを表すと推測するようになる。

no doubt は文字通りには「疑念の皆無」を意味するが、副詞用法の意味は、予想に反して、without (a) doubt や undoubtedly などと同義ではない。むしろ、表 2 が示すように、副詞用法の no doubt はことからの真実性に対する確信が比較的低い法副詞

のグループに属する。もし no doubt で表される話し手の確信の度合いが実際に低下した、あるいは低下しつつあるとすれば、その一因として上述の語用論的推論の強化が考えられる<sup>(43)</sup>。すなわち、第 2 等位接続項を修飾するのは典型的には確信度合いの低い法副詞である。談話において副詞用法の no doubt が and と共起する頻度や比率が高まると、聞き手の側で上述のような語用論的推論がくり返され、特定の推論が強化されていく。その結果として、本来の意味から語用論的に推論される意味への推移が生じると考えられる。

この節では、副詞用法の no doubt が文以外の構成素を修飾する事例を見た。特に、等位接続された第 2 項を前位修飾する用法に注目した。この用法の成立が特定の語用論的推論を誘発し、この用法の談話頻度が高まるにつれてその推論が強化されていく、語用論的推論の強化が no doubt の表す確信の度合いを低下させる要因として考えられることを指摘した。

## 5. まとめ

本稿は、現代英語のコーパス調査に基づき、副詞用法の no doubt の語法上の特徴を検討してきた。まず第 1 に、副詞用法の no doubt はもはや名詞的性質を完全に消失しており、本来の名詞用法と著しい対照を示す。第 2 に、副詞用法の no doubt は全体として 1 語の法副詞として機能しており、文中で生起しうる位置は他の法副詞が生起しうる位置と同じである。ただし、生起位置の頻度分析を行うと、典型的な法副詞の分布とはいくぶん異なる特徴が観察される。この事実を解明するには、法副詞の典型性を測定する尺度としての分布頻度、法副詞用法の成立時期との関連をさらに検討する必要がある。第 3 に、副詞用法の no doubt は構成素修飾の機能がよく発達している。とりわけ、等位接続された第 2 項の修飾語として多用される傾向がある。この位置での頻度の増加は特定の語用論的推論を強化し、no doubt 本来の確信度の高さを相対的に低下させる効果をもたらすと考えられる。

本稿では副詞用法の no doubt の語法上の特徴を明らかにするために、コーパス調査の結果に基づき、他の法副詞表現との比較を試みた。現代英語では no doubt が表す確信の度合いは法副詞の中では比較的低い部類に位置するように見える。本稿の結論を発展させて、より正確な特徴づけを得るには、さらに多くの文法、語法項目について調査を行い、適切な統計手法を用いて解析する必要がある。その過程で、他の文化化現象に共通して関わるメカニズム、特に頻度要因の効果を明らかにすることが今後の課題となるだろう。

## 注

\* 本稿は、2009 年 6 月 13 日北海道教育大学函館校で開催された平成 21 年度函館英語英文学会において「No doubt の語法とその周辺」という題目の下で口頭発表した原

稿を加筆、修正したものの前半部分である。貴重なコメントをいただいた上山恭男氏と、インフォーマントとしてご協力いただいた Andre Parsons 氏に感謝の意を記したい。

<sup>(1)</sup> Traugott and Dasher(2001) や Hopper(1991) などにおいて、多義化、重層化の典型例がいくつか挙げられている。

<sup>(2)</sup> ここでは no doubt がいつ、どのように法副詞機能を獲得したかについての考察はしない。その文法化プロセスの経緯とメカニズムについては稿を改めて検討したい。

<sup>(3)</sup> 例文の後に付した、括弧内の3文字は BNC コーパスにおけるテキストを表している。

<sup>(4)</sup> BNC コーパスの中に、(i) のように、no doubt が前置詞句補部を取っているように見える例がある。

(i) a. The orphanage was where she'd developed her pert tongue, no doubt about it. (CKE)

b. They lived well in Magdalen, no doubt of it. (HA0)

このような例は全部で21例あり、そのすべてにおいて、no doubt がコンマを伴って文末位置に現れている。(6b)のように、補部をもつ no doubt がコンマを伴わずに文中位置に生じる文は容認されないようである。また、BNC 中にもそのような実例はない。

<sup>(5)</sup> 文頭の否定構成素が (i) のようにコンマインテネーションによって主節から切り離されるときには、主語助動詞倒置が起こらない。

(i) a. In not many years will Christmas fall on Sunday.

b. In not many years, Christmas will fall on Sunday. (Emonds 1976: 28)

一方、文頭位置にある副詞用法の no doubt は、コンマの有無に関わらず、主語助動詞倒置の引き金とならない。

<sup>(6)</sup> (13)における no doubt を一語の possibly, probably など置き換えることに問題がないが、それを in all probability, I think など置き換えると容認度が下がる。それを、there is no doubt や I have no doubt のような挿入節で置き換えることはほぼ不可能である。つまり、3次語の内部構造が複雑になるほど容認度が下がるように見える。上山氏が指摘するように、ここでは知覚上の要因が関わっているかも知れない。

<sup>(7)</sup> Webster 第3版(1965), OED 第2版(1988), COD 第6版(1976)などの英英辞書および近年出版されている学習用英和辞書12種類を調査してみたところ、全部の辞書が何らかの見出しを立てて、副詞用法の no doubt の意味や用例を記述している。すなわち、no doubt をひとつの語彙項目として扱っているようである。

<sup>(8)</sup> 文頭、文中、文末位置に生じる比率に関して probably や doubtless と比較するために表2の頻度データに基づいて2項比率検定を行なった。その結果、no doubt は文頭、文末位置での使用比率が有意に高く、文中位置で使用される比率は有意に低いと言える。

<sup>(9)</sup> 対応分析とは、頻度データ、質的データの個体と変数との関連やパターン分析を行う多変量解析の手法の一つである。金(2007: 87)によれば、分割表において行の項目と列の項目の相関が最大になるように、行と列の双方を並べ替え、関連性の強いもの同士が近似になるような値をとるよう処理される。対応分析の実行環境として、オープンソースのデータ解析・マイニング処理の専用ソフト R を用いている。ここでは、Jeremy Mazet と Francois Husson の両氏によって提供されている対応分析のための R 用パッケージ FactoMineR を用いている。

<sup>(10)</sup> 現時点では次のような推論も可能であろうと考えている。すなわち、法副詞を含む文副詞にとってもっとも基本的な生起位置は文頭位置であって、歴史的にも早い段階で成立したと仮定してみる。この仮定の下では、文中位置は派生的な位置であるため、比較的後の段階ではじめて生起可能となる。その際、文副詞として十分に確立している成員から順次、文中位置で生起可能になると考えられる。文中位置への接近可能性がこのように制限されているとすれば、文副詞として十分に確立していない段階にある成員がこの位置に生起するには、文副詞としての解釈、機能を保障するために、音調などの助けを借りる必要が生じるだろう。もし以上のような推論が成立するとすれば、副詞用法の no doubt がコンマ音調を伴うことが多いという事実から、現代英語の段階ではたとえば probably ほどには法副詞として成熟していない、と言えよう。

<sup>(11)</sup> 一般に法副詞は文を修飾できるけれども、修飾可能な文の種類に関して制限がある。岡田(1985:240)によれば、法副詞は文が記述することがらの真実性に対する話し手の確信の程度を表すものであるから、言われていることがらの真または偽を前提にしている文や、言われていることがらが真偽値自体をもたない文とは両立しない。このような制限は副詞用法の no doubt にも同様に当てはまると思われる。

(i) a. \*{ He regrets/It is surprising } that he certainly examined all the cases.

b. \*If, apparently, he had stayed at home, he wouldn't have met such an accident.

c. \*I wish he, probably, hadn't examined all the cases.

(ii) a. \*{ I doubt/It is (im)possible } that they can certainly leave early.

b. \*She demands that certainly he examine all the cases.

c. \*We ordered him certainly to examine all the cases.

d. \*If, certainly, he examines all the cases, he will find the truth.

e. \*Certainly, come and see me tomorrow.

(岡田 1985: 152-159)

<sup>(12)</sup> 岡田(1985: 149)は(i)とカッコ内の文が同義でないことを観察している。

(i) He combined zinc and, possibly sulphur.

( ≠ Possibly, he combined zinc and sulphur.)

この事実は、(i)のような文の生成において、法副詞をたとえば文頭位置から移動す

る派生方法が妥当でないことを示している。したがって、Ernst(1984)が主張するように、法副詞などを名詞句副詞(NP adverb)として名詞句左端の位置に基底生成する方法が妥当と考えられる。

<sup>12)</sup> 表2および下の(i)式において、F(x)はコーパス中のandの頻度、F(y)は当該法副詞の頻度、F(xy)はandと当該法副詞からなる2語連続、バイグラム(bigram)の頻度、Nはコーパスサイズをそれぞれ表す。相互情報量(mutual information)とは、コリケーションの強さを測る統計量の一つで、次の式によって算出される。

$$(i) MI = \frac{\text{観測共起度数}}{\text{期待度数}} = \frac{F(xy)}{\frac{F(x)*F(y)}{N}}$$

Barnbrook(1996)のように、底2の対数を用いてMIを算出することもある。

$$(ii) MI = \log_2 \frac{\text{観測共起度数}}{\text{期待度数}}$$

Barnbrookによれば、MI得点の値が3以上(ii)式で換算すると1.58以上)であるとき、有意であると判断できる。表2におけるMI得点の右肩にある星印はこの基準に基づいている。

<sup>13)</sup> Hopper and Traugott(2003, ch. 4)は、文法化における語用論的推論の役割と具体的事例を考察している。一方、Traugott and Dasher(2001: 162)は、indeedの本来の意味からの変化を論じる中で、確信度の高さが常に反意性(adversality)を引き起こすと述べている。本稿で扱っているno doubtもまた本来に高い確信度を表わす点で、意味変化の要因を内包している。すなわち、あることがらを「何の疑いもない」ほど明らかという強い確信をつけて表明することは、裏返すと、何らかの疑いを抱いているからこそ、それを隠し、打ち消すための一種の誇張表現が用いられていると解釈される可能性をうみだすと考えられる。

法副詞のdoubtlessは統語的、意味的にno doubtとよく似た性質を示す。おそらく、doubtlessの意味変化についてもno doubtと同じ議論が当てはまると思われる。両者の違いは、doubtlessのフォーマリティが高く、口語において極端に頻度が低い点である。詳細な議論は稿を改めて行うことにしたい。

#### 参考文献

- Barnbrook, Geoff (1996) *Language and Computers: A Practical Introduction to the Computer Analysis of Language*, Edinburgh: Edinburgh University Press.  
Bellert, Irene (1977) "On semantic and distributional properties of sentential adverbs," *Linguistic Inquiry* 8, 337-351.

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan (1999) *The Longman Grammar of Spoken and Written English*, London: Longman.  
Emonds, Joseph (1976) *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*, New York: Academic Press.  
Ernst, Thomas B. (1984) *Towards an Integrated Theory of Adverb Position in English*, Indiana: Indiana University Linguistic Club.  
Greenbaum, Sidney (1969) *Studies in English Adverbial Usage*, London: Longman.  
Hopper, Paul J. (1991) "On some principles of grammaticalization," in Traugott, E. C. and B. Heine(eds.) *Focus on Approaches to Grammaticalization*, 17-35. Amsterdam: John Benjamins.  
Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott (2003) *Grammaticalization*, 2nd edition, Cambridge: Cambridge University Press.  
Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, Cambridge, MA: MIT Press.  
Kilgarriff, Adam (1996) "BNC database and word frequency list," retrieved on Nov 24, 2009 from <http://www.kilgarriff.co.uk/bnc-readme.html>.  
金 明哲 (2007) 『Rによるデータサイエンス』, 東京: 森北出版.  
岡田 伸夫 (1985) 『副詞と挿入文』, 東京: 大修館書店.  
R Development Core Team (2008) *R: A Language and Environment for Statistical Computing*, R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria.  
Swan, Michael (2005) *Practical English Usage*, 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.  
Traugott, Elizabeth C. and Richard B. Dasher (2001) *Regularity in Semantic Change*, Cambridge: Cambridge University Press.